

平成11年度第1回7月4日

演題：反復する運命

演者：小川 豊昭（保健科学部）

私は、精神科医としてあるいは精神分析家として個人の歴史に関わり、経験を積むうちに、そこには驚くほどに反復の多いことに気がついた。この反復そのものは反復強迫として知られているものであり、フロイトも「快感原則の彼岸」において中心テーマとして取り上げている。しかしこの反復に直接立ち会ったときの印象は強烈であって、実に不思議なことだという驚きの感情を引き起こす性質のものである。反復強迫だから当然であるとはとても思えないのである。そこで私は、運命の反復や運命的な出会いや偶然の例をいくつか挙げて検討し、何が運命の反復を引き起こすのか、またその反復を可能にしているものは何か、このように一見偶然に見える出来事を必然的にもたすメカニズムはどのようなものか、そして人間は運命を逃れることが出来るのかを考察した。

反復する運命の例としては、「目を傷つける母―息子」「母親を取り返そうとする青年」「命がけで愛情を求める女性」「破滅する男性」「途中で諦めるな」と題した症例を検討した。ここで反復されるドラマはほとんどが両親との関係の再現であり、どちらかの親自身が体験したことの反復である場合も多い。そして、ここで問題となっているのは、親との同一化を基盤にして親に対して持つ性的願望の実現、幼い時の誓いの実現という意味を持っている。その幼いときの誓いとはもともと抑圧されなくてはならない願望である。もともと抑圧されなくてはならない願望が、その人の運命として実現されて表に現れてくるし、またその人の人生の全体を支配しているとも言える。さらに、いずれのドラマもエディプスのドラマに還元して見ることが出来るが、その家族ごとの特有のバリエーションがあり、そのバリエーションは世代間で伝達されて同じ物語が繰り返されると言える。これをどう考えることが出来るだろうか。おそらくは、人類に普遍のエディプスコンプレックスの神話があり、その普遍的な神話を基盤にその上部構造のみが変化した家族神話、あるいは個人的神話が形成されていて、個人の運命はこのように導かれていると言うことではないだろうか。こうして反復のタイプを決定し根底において反復を動機づけているのは、様々な個人的神話であることが明らかとなった。

最後の問題点は、意識的に行っても困難な反復を、無意識はどのようにして実現するのかと言うことであ

る。すなわち、あることが反復されるためには、無意識はどのように現実を認識し、どのように計算して判断するのかということである。「目を傷つける母―息子」で見たように、息子はどのようにお膳立てし行動したなら、暗闇で角膜を切るという絶妙なことが出来るのだろうか。一見偶然であることが実際には必然であるためには、無意識の機能の仕方にいくつかの特異性が必要である。第一は、無意識は微かな徴候をもとに表には現れていないものを、知覚出来るものと同等に認知しているということである。第二には、表に現れているものも、ほとんど気づかれないようなものも、他者の行動も欲望も、自らの行動もすべてが把握され記憶され計算されている。すなわち膨大でかつ完璧な記憶とそれに基づいての計算である。第三には偶然物を待ちかまえていて、必然の文脈へと取り込み因果関係を逆転して体験させるテュケーの機能である。